

滋賀短期大学 令和5年度卒業式 学長式辞

今年はまれにみる暖冬といわれ、一気に暖かい春になるかと思えば、一転して寒い風が吹いたりする3月でしたが、ようやく春らしい日差しが見られるようになりました。今日ここに晴れてみなさんの卒業式を迎えることができ、うれしく思います。卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。

ご臨席の保護者の方々も卒業するお子様の晴れ姿に、さぞお喜びのことと存じます。今回の卒業式は、久しぶりに保護者の方々にも、全員、会場にお入りいただきました。お子様たちの成長された姿をよくご覧いただきたいと思っております。

また本日は、ご来賓の方々も多数ご臨席いただいております。ご多忙のなかお運びいただき、心より御礼申し上げます。NHK 天津放送局の小磯局長様、京都新聞滋賀本社の石川代表様、さらに本日は多くの名誉教授の先生方においでいただいております。卒業生に対するご厚情にこころから御礼申し上げます。

今年も総勢239人の卒業生がいますが、そのなかに本学として新たにデジタルライフビジネス学科の卒業生15人も並んでくれています。2年前に発足した新しい学科の第1期の卒業生として誇りをもって新しい一歩を踏み出してほしいと思っております。

さて新型コロナの感染は一段落しましたが、それに加えてインフルエンザが流行したりして、皆さんはウィルスによる感染症というものが社会に対する大きな危機になるということ、最も強く思い知らされた世代といえるでしょうが、それだけではなく様々なリスクや不安を感じさせる出来事に見舞われた世代ともいえるのではないのでしょうか。

このお正月に能登半島で起こった大地震は、思いもよらない大きな被害をもたらしました。被害に遭われた方々にはここでも哀悼の意を表したいと思っておりますが、この地震で13年前の東日本大震災の甚大な被害を思い起こした人も多かったでしょう。みなさんもまだ小学生だったかもしれませんが、市

街地を襲った大津波の情景は鮮明に覚えているのではないのでしょうか。少し前になりますが、私たちの世代は 1995 年 1 月に起こった阪神・淡路大震災も忘れることができません。私たちは一生の間に未曾有の自然災害を一体いくつ経験させられるのか不安にならざるを得ません。

私たちを不安にさせるのは、自然災害だけではありません。みなさんが入学したときにこの場で私はウクライナのことを取り上げました。残念ながらウクライナでの戦争はまだ終わる気配もありません。ウクライナへの支援体制も不安な要素が増えています。また 2 年前に紹介したロシアのテレビで No War という反戦のプラカードを掲げたプロデューサー、マリーナ・オフシェンニコワさんも、圧力を受けながらロシアに暮らしていましたが、今はフランスに亡命しているそうです。祖国ロシアを愛するがゆえに反戦を主張したという彼女の思いはかなえられそうにありません。

ウクライナ戦争が膠着状態になっているなかで、今度は中東でイスラエルとパレスチナに拠点をもつイスラム組織ハマスとの間に大きな武力衝突が起きました。パレスチナ問題は長年にわたって解決できないまま火種を抱えてきた国際関係の大きな課題とあってよいのですが、今回はこの衝突でこれまでにないたくさんの民間人の犠牲者がでています。とりわけ犠牲になっているのが子どもたちです。国連の報告によれば、紛争地であるガザで子どもたちの犠牲が今回だけで 1 万 2300 人にのぼり、これは最近 4 年間に世界のすべての紛争地域で犠牲になった子どもたちの数を上回っているとしています。

ウクライナもパレスチナも、紛争の中で犠牲になるのは、抵抗する力をもたない子どもたちであるという事実を、私たちはどう考えればいいのでしょうか。

いまこのような不安定な時代をいう用語として、VUCA（ブーカ）の時代という言い方があります。辞書の説明によると、これは先行きが不透明で、将来の予測が困難な状態を指す言葉だそうです。V は Volatility（変動性）環境や状況が急激に変化すること、U は Uncertainty（不確実性）未来の出

来事や結果が予測できないこと、CはComplexity（複雑性）問題や状況が多面的で理解しづらいこと、AはAmbiguity（曖昧性）情報や意味が不明確であることをいうのだそうです。

もともとは戦争とは国と国との間に起こるものだとしていたのが、2001年のアメリカでの同時多発テロ以来、従来の戦争観では対応できないことから使われるようになった軍事用語のようですが、今はビジネスや社会状況を表す用語として、皆さんはまさにVUCAの時代に生きているというように使われています。確かに現代は先ほど述べたように予測できない自然災害の不確実性、突発的に巻き起こる戦争という理不尽さなどに満ち溢れています。私たちはなすすべもなく立ちすくんでいるだけのように見えます。

しかし私たちは同時に身近なところでわずかではあっても明るい光を見ているのも確かではないでしょうか。

能登の震災の後、多くの人が救援のためのボランティアに駆けつけました。なかには東北の福島県から、自分たちが震災に遭った時に助けてもらったからといってやってきた人もいました。台湾をはじめ、国際的な援助もたくさん寄せられています。

これに関連して純美禮学園としていいニュースだといえるのは、本学の附属高校の女子バスケットボール部が、能登の七尾市にある鵬（おおとり）学園の女子バスケット部の選手を招いて合同練習をしたことです。鵬学園の校舎や寮が被害に遭い、授業や練習ができない状態なのを知った附属高校が、大津でオンライン授業と合同練習を行うことを企画してくれました。これまでから交流はあったようですが、今度のことで絆が一層深まったのではないのでしょうか。

ウクライナのことでは、今滋賀県にも複数のウクライナの人たちが避難してきています。その中にウクライナで大学に通っていたけれどそれを中断しており、日本にいる間に日本語を勉強して、できれば専門的な勉強も進めたいという若い人がいるのですが、その人たちに、この4月から本学で開講している留学生向けの日本語の授業をとってもらうことにしました。これもわずかな支援にすぎませんが、私たちが身近でできる現実的な支援だと思うのです。

さきほど VUCA という用語を紹介しましたが、私はその向こうを張ってブーカの反対の CURB (カーブ) というスローガンを提唱したいと思っています。C は Certainty (確実性・堅実性)、U は Usefulness (有用性・有効性)、R は Realism (現実性・実現性)、そして B は Bravery (勇気・勇敢さ) です。すべて VUCA とは反対方向を示し、VUCA の時代を生き抜くために必要な資質です。

何かをやらうとするとき、まずそれがどれだけ確実なものなのか、そしてそれは何の役にたつのか、そしてそれはどれだけ実現可能なものなのかを考え抜いていく。そして最後はそれを行う勇気があるかです。

さきほどの附属高校における能登のバスケットボールチームとの合同練習などは、この CURB がそろっていた企画でした。

今日は最初不安な気持ちになるような話でしたが、それにめげることなく前向きに CURB の精神で進んでいってほしいと思います。そして一人の社会人として、自分の身近なところから不安でない世界を少しずつでも実現していきましょう。これを私の皆さんへの贈る言葉といたします。

令和 6 年 3 月 15 日

純美禮学園理事長・滋賀短期大学学長

秋山元秀